

小林照秀

—西谷津溜池を造った北酒出村庄屋—

〈文化6年(1809)～明治17年(1884)〉

那珂市歴史民俗資料館



(小林照秀翁遺澤之碑)

北酒出村は、水利を慶安4年(1651)水戸藩水積役の永田茂衛門父子の築いた岩崎江堰(那珂郡大賀村)に求めていたが、その源は数里(20～24km)も離れていることから末端となる当地への給水は十分な量が確保できず、加えて水路創設以来長い年月を経ているために、泥などが田間の用水路を塞いで毎年の田植えも難渋する有り様であった。

これを憂えた地元庄屋の小林太郎左衛門照秀は、溜池を新設して灌漑に供しようと水戸藩の許しを得て、村内「西谷津」の出水多量の地を選んで工事にかかり、自ら工事を督励しながら数か月を費やし、天保13年(1842)竣工した。これによって南・北酒出村二村の田は水涸れすることが無くなり、秋の収穫もこれまでの倍から5倍にもなったという。

この結果、田方用水が十分に合うようになったので、天保13年2月には江下(岩崎江堰水利組合)を離れることを北郡奉行所に願い出ている。なお、この願書によれば、江下を離れることで、北酒出村では1年に7～

8両宛も村益になるとあるので、江下村の負担も大きなものであったことがわかる。

溜池はその後、何度かの改修・整備工事は行われているが、150年を経た現在でもその受益面積は30ヘクタールにも及んでおり、いまだ多くの農民が小林翁の特別の恩恵に浴しているのである。

この小林翁の偉業に対して、南・北酒出村の有志は、明治35年(1902)2月、西谷津溜池北側の堤唐の上に「小林照秀翁遺澤之碑」を建立した。碑の篆額は当時の那珂郡長池田序介によって書かれ、碑文は安春之介(号は慈州)の作である。「我が村灌水充足して稲穀豊熟以て窮餓の厄を免る。是豈小林翁の賜に非ざらんや。宜しく捐資して碑を建て以て其の徳恩に報ゆべし」と、報恩感謝の意を後世に残している。

この碑文によると、小林翁は、諱は照秀、太郎左衛門と称し、木崎村北酒出の出身で、鎮守府將軍源義家の裔、大学頭義盛の系に連なる。義盛は下野小林城に居城に因って小林姓を名乗り、その子但馬守義忠が佐竹に属して常陸に住んだ。4代の孫信濃守義房は佐竹氏の秋田移封に際して、北酒出村に退隠し、農を業として子孫因って家とする。考(父)の諱は義秀、半重と称し、妣(母)は高野氏、小林翁はその長子という。

幼時より鋭い才気、ものに恐れず臆せぬ気力と見識を持ち、文政10年(1827)父の後を継いで組頭となり、さらに天保11年(1840)に庄屋となった。そして新溜池の竣工に際しては、その功績が水戸藩より認められ城中に招かれて慰労を受けた。慶応2年(1866)には苗字帯刀を許された。

翁は明治17年(1884)12月24日、75歳で病没したが、南・北酒出村では干ばつの憂いが無くなったばかりでなく、収穫も2から5倍と増え、「郷民今に到るまでその恩徳に頼る」、「郷人今なお伝誦して衰えず」(碑文)と感謝されており、新溜池北側堤唐上に建立された「遺澤の碑」が篠藪の中から翁の霊を見守っている。

〈参考文献〉『那珂町の碑文』



(6人物④) R7.3.13 現在

(西谷津溜池)